新版教科書で、こんな授業がしたい

甲斐利恵子先生のアイデア

編集委員の甲斐利恵子先生（東京都港区立赤坂中学校教諭）と宗我部義則先生（お茶の水女子大学附属中学校教諭）に、新教材を使った授業のアイデアをお聞きしました。



甲斐利恵子

福岡県生まれ。東京都港区立赤坂中学校教諭。光村図書中学校『国語』教科書編集委員。専門は国語科単元学習。著書に、『子どもの情景』（共著・光村教育図書）、『聞き手話し手を育てる』（共著・東洋館出版社）など。

心を開く「国語教室びらき」

「花曇りの向こう」（一年）

読む

クスッとおもしろくて、ほんのちょっと胸がツンとする。そんな瀬尾まいこさんらしい温かさが感じられる、とてもよい作品ですね。一年生の一学期といえばまだ、子どもたちは、新しい人間関係をうまく作れずにいる時期。「授業でどんな発言をしたらいいんだろう」などと、たくさんの不安を抱えています。この作品の温かな雰囲気を生かして、彼らの心を開く「国語教室びらき」の授業ができたらいいなと思います。

気に入った会話文を発表し合う

一方で、作品の魅力の一つである、軽妙な会話にも注目したいところです。ですから、私なら、「いちばん気に入った会話文を発表し合う」という授業をしたいですね。会話文だけを抜き出した一覧表をこちらで用意し、その中から、子どもたちに気に入ったものを一つ選ばせ、理由とともに発表させるんです。

みんなで会話文の一覧表を見るだけでも、教室の空気はやわらかくなるはず。「こんなことを考える子なんだな」と、教師がにこにこしながら発表を聞いていられるのも、この作品のよさです。学習のルールも、楽しい雰囲気の中で伝えていけるでしょう。

そして、授業の終わりには、「ばあちゃんってどんな人？」「川口君ってどんな人？」などと尋ね、好きな登場人物の人物像について、簡単に述べさせてみたいと思います。そうすれば、この後の学習で、人物像や作品における人物の役割について考えるときのステップにもなります。



「花曇りの向こう」（1年）

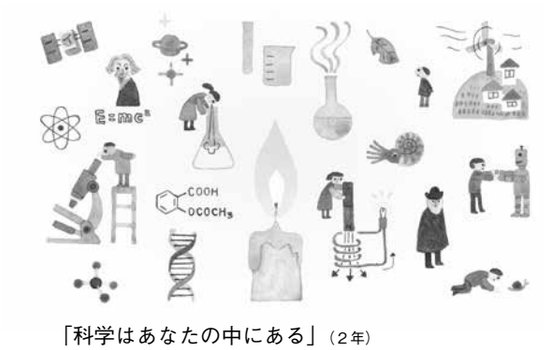
「登場人物が魅力的なんですよね。特に、『ばあちゃん』が存在する意味は大きい。そのことを，子どもたちと語り合いたい」と，甲斐先生。

「なぜ」と問う人

「科学はあなたの中にある」（二年）

読む

授業をするのが特に楽しみなのが、この説明文です。私、筆者の最相葉月さんのファンなんですよ（笑）。以前、最相さんと対談をさせていただいたとき（※1）に感じたのは、彼女が自分の中にある問いを原動力にして、その答えを求めて人にぶつかっていく、エネルギーの力強さです。その力強さがノンフィクションという文章を紡ぎ出しているということに圧倒されました。この文章も同じはず。説明文ではありますが、子どもたちに、筆者の思いを読み取らせるのもいいなと思います。



「科学はあなたの中にある」（2年）

「『平らかな気持ちで検証し，真実に一歩でも近づこうとする』（教科書 P223 L6･7）という部分から，筆者の価値観が読み取れます。この価値観に出会わせたいんです」。

科学の出発点に光を当てる

今、考えているのは、「『なぜ』と問う人」という単元です。これは、現代の科学技術を生み出した人について調べて考えの道筋をたどり、出発点の「問い」が何だったのかを考えるという学習。最相さんのご著書『調べてみよう、書いてみよう』（講談社）には、問いを立てて調べる過程が紹介されているので、これを使って「問い」にさかのぼることもできそうです。

「なぜ」と問うた人たちの、科学の出発点に光を当てることで、問うこと、問いを柱にして物事を追究することの価値を、子どもたちに伝えたいと思います。最後に、自分でも問いを立てて、それをもとにノンフィクションを書かせるなどできれば、なおいい。そうやって、「『なぜ』と問う人」を育てていきたいですね。

学ぶということ再考

「三年間の歩みを振り返ろう」（三年）

話す・聞く　書く

単なる思い出ではなく、「学び」を振り返るというのが、すばらしいですね。特に、「三年間の歩みを振り返ろう」（三年）がいいなと思います。私自身、中学校三年間の学びを振り返る「学ぶということ再考」という単元を実践したことがあります。子どもたちは、三年間で劇的な成長を遂げています。今の自分に成長の実感があるから、過去の未熟さを客観的に見ることができて、学びについて語り合うことが、とてもしっくりきたのを覚えています。

このとき大切なのが、「何を通して」振り返るか。私は、印象に残った「言葉」、何かを教えてくれた「人」という二つの観点で振り返らせました。教科書P211には、

※1　甲斐利恵子先生と最相葉月さんの対談「『問う』ということ」の詳細については，「中学校 国語教育相談室」No.77 を参照。

他の観点も示されているので、それを参考にすることもできますね。

学習記録を活用

過去の教科書を取っておけば、それを使って振り返ることはできると思いますよ。ちなみに、私は、三年間ずっと子どもたちに学習記録をつけさせているので、それを使いました。学習記録があれば、より具体的に、学びを振り返ることができるかもしれません。各学年の教科書冒頭「続けてみよう」では、記録やメモの取り方が紹介されています。これを活用しながら学習記録をつけて、この学習のための準備をしておくのもいい方法だと思います。

学習用語に出会うたびに

「文学的な文章を読むために」
「説明的な文章を読むために」
（一～三年）

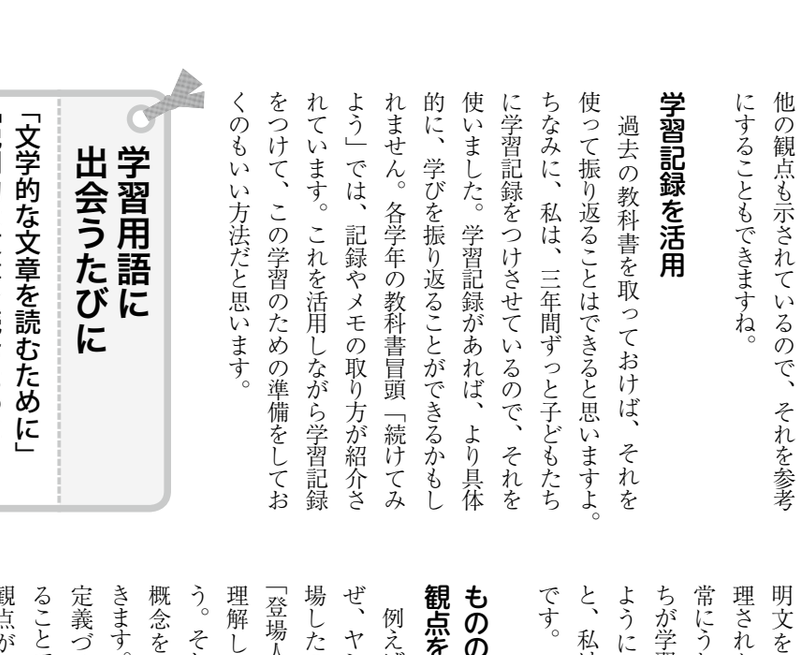
読む

各学年の巻末折り込み「文学的な文章を読むために」「説明的な文章を読むために」は、ぜひ活用したいページです。文学・説明文を読むときの学習用語が整理された（本誌P6参照）のは、非常にうれしいことです。子どもたちが学習用語を身につけ、使えるようになることの意義は大きいと、私はつねづね思っているからです。

ものの見方・考え方の観点をつくる

例えば、「故郷」（三年）で、「なぜ、ヤンおばさんはこの作品に登場したのか」を考えるためには、「登場人物の設定」という概念を理解している必要があるでしょう。そして、私たちは、そうした概念を言葉とともに獲得していきます。つまり、抽象的な概念を定義づけた学習用語を身につけることで、ものの見方・考え方の観点がつくられていくのだともいえます。

授業の中では、積極的に学習用語を使って、子どもたちに浸透させていきたいですね。まずは、学習用語に出会うたびに、この折り込みを開いて、みんなで確認するところから始めてみるつもりです。



「文学的な文章を読むために」（1年）

「文学を読むための基本的な学習用語が整理されています。必要に応じて示されている，教科書本文の用例は，子どもたちと確認するときに活用できそうです」と，甲斐先生。

宗我部義則先生のアイデア

「ずばりひと言」の鑑賞文

「竹」（一年）

読む

萩原朔太郎作品の中でも、取り上げやすい詩ですね。子どもたちは、「『生え』の繰り返しがおもしろい」と感じるはず。その秘密を考えるような形で、繰り返しや連用中止の表現に注目させたいと思います。

感じたことと表現とをつなぐ

音読では、「生え」の後の余韻を想像しながら読み方を工夫することで、描かれている竹の姿をイメージさせたいです。その後は、「竹が生え、竹林には静寂が訪れた。」などと、「竹が生え」の後に続く「ずばりひと言」の鑑賞文を書かせるのもおもしろそうです。音読して感じたことと表現とをつなぐんです。

ただ、その際は、子どもたちが取り組みやすいように、文型は教師のほうで示しておきたいところです。例えば、「あたりは一面、にぎやかな感じになった。」の「○○は、～だ／～になった。」という型。それから「作者は、真っすぐな気持ちでいる。」のように、「（自分も含めて）作者は、～な気持ちだ。」という型もあるといいかもしれません。

身の回りに竹林がなく、その清冽（せいれつ）な感じを想像するのが難しい場合もあるでしょう。そんなときは、授業中、青々とした竹や竹林の写真をスクリーンに映すなどできればいいでしょうね。きっと、感じるイメージが違ってくるはずです。

筆者の思いを追体験する

「生物が記録する科学
――バイオロギングの可能性」
（二年）

読む

すっと読めて、いつの間にか筆者に共感してしまう。そんな力のある文章ですね。調査を進める筆者の、わくわくする思いを追体験しながら読ませたい説明文です。

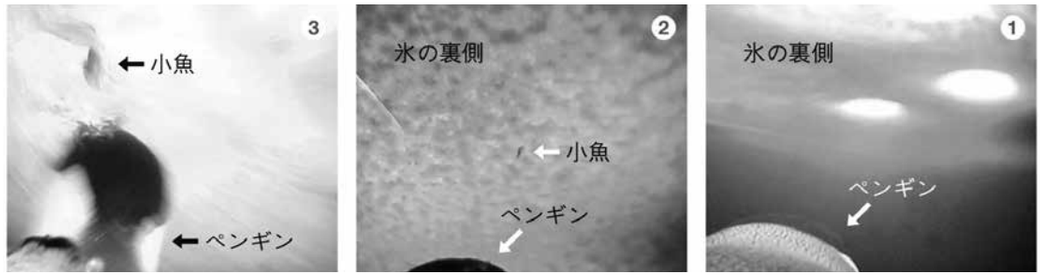
筆者の心の動きを率直に感じるには、文章中の「事実」と「そこから筆者が考えたこと」の関係を押さえるのがいいでしょう。デジタル教科書を使い、この二つを色分けしていくのもいい方法ですね。

説明文の授業では、概念的・論理的な理



宗我部義則（そがべよしのり）

埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。



「生物が記録する科学――バイオロギングの可能性」（２年）

「どれがペンギンかはわかるけれど，なぜこんな写り方なのか。それを考えることで，文章に書かれていた『カメラを背中に付ける』ということが実感できるんです」と，宗我部先生。

解だけでなく、身体的・感覚的な理解、つまり「腑に落ちてわかる」ことも大事にしたいと、私は考えています。

そこで活用したいのが、文章中の写真やグラフです。例えば、教科書Ｐ44の**写真Ａ**（上写真）。文章だけではなく、写真を見て「なぜ、ペンギンがこんな写り方をしているのか」と考えるからこそ、「カメラを背中に付けるって、そういうことか！」と、腑に落ちてわかるんです。そんなふうに、写真やグラフを使って、子どもたちの感覚に訴え、気づきを引き出したいですね。

筆者と対話するように

「誰かの代わりに」（三年）

読む

これに出会うことが、この教科書を使う意味の一つ。そう言ってもいいほどにすばらしい文章ですね。この文章を深く読むとは、投げかけられたテーマから、自分の考えを紡ぎ出し、友達とやり取りするということなのだろうと思います。筆者・鷲田清一（わしだきよかず）さんが伝えようとしたことを、経験をもとに話し合い、「こういうことが言いたいのですか？」と、彼に問いかける。それは、つまり、鷲田さんと対話するということです。私はそうした授業がしてみたいですね。

ディスカッションのスタイルで

考えられるのは、ディスカッションをすることです。まず、子どもたちに、文章中で自分がわからない点を短冊に書き出させる。そして、そこから、各自が答えられるものを選び、考えを述べるところから話し合いを始めるんです。短冊には、「こう考えたが、それでいいか」という、確かめの質問も書くようにさせます。そうやって「鷲田さんなら、こう答えるだろう」「私はこう思う」と、考えを返し合うことができたら最高でしょうね。

また、この文章をきっかけに、読書に展開するのも一つの方法です。「自分について考えさせられた本」などとテーマを決めて、読書会を開くのもいいでしょう。

授業の終わりには、『パンセ』の「人間は考える葦である」という言葉（※2）にも触れてみたいです。わからないまま終わってもいい。何年も経って、いつか子どもたちの中に芽吹く。そんな授業になればと思います。



「誰かの代わりに」（３年）

「国語の授業は，種まきです。今はわからなくても，何年後かに，この挿絵のように芽吹けばいい。いつか，この文章の意味にたどり着いたときに，『みんなで語り合ったな』と思い出してもらえる授業にしたいです」。

スピーチをインタラクティブに

「社会との関わりを伝えよう」（三年）

話す・聞く

わかりやすい、いい教材です。教材の目標は、場と相手の様子に応じた話し方をすることですが、そのためにも、スピーチがうわべだけのものにならないよう、活動に「真正性」、つまり現実味をもたせることを意識したいと思います。

例えば、話題。教科書にも例がありますが、私なら、「考えさせられたニュース・出来事」を設定したいですね。子どもたちが日頃、抱いている社会への疑問・意見に焦点を当てて、「中学三年生の主張」のようなスピーチをさせてもいいかもしれません。

それから、私は、スピーチ力を、スピーチの内容について質問・意見交流することも含めた、インタラクティブなものだと捉えています。この教材でも、スピーチの後に、質問や意見交流の時間を取り、「一往復半」の生き生きとしたやり取りをすることにもウエイトを置きたいですね。

記録・発表の日常化

「続けてみよう」（一～三年）

書く

以前にもご紹介したことがありますが（※3）、私は、「言葉の手帳」（一年「続けてみよう」）のように書き留めた言葉を、毎日の国語の時間に発表させるという実践を続けています。

当初のねらいは語彙の拡充、情報収集・批評の日常化でしたが、発表に一人一人の個性が見えてきて、クラスづくりのうえでも大いに意味がありました。ですから、この教材を使って、日常的な記録・発表に取り組むことをお勧めしたいですね。

教科書で紹介されている例は取り組みやすいものがほとんどですが、「創作メモ」（二年）は、とっつきにくさを感じるかもしれません。しかし、あまり形にこだわらずに、一行詩みたいなものや、思いついたすてきな言い回しでもいいので書き留めさせるようにすれば、負担感は減るでしょう。「描写」の学習とつなげても、おもしろそうです。

そうして、書きためるだけでなく、少しずつ発表し合っていくことを大事にしたいです。

※２ 「人間は自然のうちで，最も弱い一茎の葦にすぎない。だが，それは考える葦である」
※３ 「中学校 国語教育相談室」No.76 の「言葉の宝箱ノート」の実践を参照。